

至自										昭
										20
9	8	8	8	8	8	8	8	7	3	1
18	30	21	20	19	18	15	9	10	20	16
<p>軍令陸甲第九号により編成完結</p> <p>間島省延吉県間島において編成完結</p> <p>(第九国境守備隊および第一一二師団の各部隊よりの転入者をもつて編成)</p> <p>同日より師団各隊よりの病馬の収容・診療救護等に従事</p> <p>一部は師団の陣地構築中の八道河に移駐病馬の収容ならびに救護</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>停戦</p> <p>間島および八道河において武装解除</p> <p>八道河出発</p> <p>間島収容所に収容、間島残留隊と合流</p> <p>将校・下士官兵に区分される</p> <p>下士官兵は間島第二作業大隊(少尉 高浜武)に編入</p> <p>同地出発</p>										

## 第二二七師団病馬廠略歴

通称号 満第八二三部隊  
英邁第一五二七四部隊

2475

至自				
	11	11	10	10 9
	7	3	20	2 29
廠長 獣医中尉 柳沢今朝次郎	満洲里經由入「ソ」	同地出發	将校は間島将校第一大隊（大佐 谷岩藏）に編入	輝春經由入「ソ」

至 自						昭 20	年	才 一 二 八 師 団 司 令 部 略 歴
						4 1	月	
						10 16	日	
8 8 8	8 8	6	4 1	10 16				略
16 14 12	11 9	1						歴
<p>軍令陸甲第九号により編成下令 牡丹江省東寧泉城子溝において編成完結 (昭和二十年四月南鮮に転用した第一二〇師団司令部が編成担任となり、第一二〇師団の残置者を基幹とし、在満の他部隊よりの転入者をもつて編成) 同日より同地の警備</p> <p>主力は、間島省汪清泉羅子溝に陣地構築のため移駐 一部は城子溝に残留し、同地の警備</p> <p>日「ソ」開戦となり各隊は、戦闘行動開始 主力は樺皮甸子に転進</p> <p>城子溝残留隊の主力は、樺皮甸子において本隊に合流 一部は、羅子溝付近において「ソ」軍と交戦</p> <p>主力は、樺皮甸子付近において「ソ」軍と交戦</p>						略		
								摘要

2477



					昭	年		
					20			
8	7	5	5	4	4	1	月	
9	5	末	17	中旬	10	16	日	
<p>日「ソ」開戦により大城子南溝残留隊は、主力に合流するため同地を出発。途中八月十日河西駅付近において「ソ」軍の攻撃をうけ四散し、牡丹江および蘭崗</p> <p>現地応召者の編入</p> <p>一部は大城子南溝に残留</p> <p>主力は穆稜県大喊廠、老夏家付近において陣地構築（第一一号演習と呼称）</p> <p>現地応召者の編入</p> <p>（第二三三旅団と同行動し、八月二十六日勝関陣地で武装解除）</p> <p>第二大隊を石門子に派遣（東寧監視隊）</p> <p>同日より同地の警備</p> <p>（歩兵第二六〇連隊の編成担任により、第一二〇師団が、昭和二十年四月南鮮転用時の残置者および、第三第一一國境守備隊、重砲兵第九連隊よりの転入者を基幹とし、在満の他部隊からの編入者をもつて編成）</p>					<p>軍令陸甲第九号により編成下令</p> <p>牡丹江省東寧県大城子南溝において編成完結</p>		<p>歩兵才二八三連隊略歴</p> <p>通称号 満第六四七部隊 英武第一五二八二部隊</p>	<p>略</p> <p>歴</p>
					<p>摘要</p>			

2479

至	自	至	自	至	自	至	自	至	自
9	9	9	9	9	9	8	8	8	8
18	13	6	2	6	1	20	17	29	28
<p>に 向 かい 分 散 行 動</p> <p>老 夏 家 出 発。 大 喊 廠 着</p> <p>主 力 は 大 喊 廠 出 発</p> <p>老 夏 家 を 経 て 東 京 城 着</p> <p>同 地 に お い て 武 装 解 除</p> <p>一 部 は、 老 夏 家、 天 橋 嶺、 大 興 溝 等 に お い て 武 装 解 除 を う け、 以 後 東 京 城 収 容</p> <p>所 に 収 容</p> <p>主 力 は ( 東 京 城 秋 山 作 業 大 隊 ( 少 佐 秋 山 輝 雄 )</p> <p>( 東 京 城 第 二 三 作 業 大 隊 ( 大 尉 小 川 三 夫 )</p> <p>に 編 入</p> <p>東 京 城 出 発</p> <p>緩 芬 河 経 由 入 「 ソ 」</p> <p>連 隊 長</p> <p>大 佐 石 丸 繁 雄</p>									

昭和20年		歩兵才二八四連隊略歴						
年	月	日	4	5	5	6	7	8
		16	16	17	24	9		
略歴		<p>軍令陸甲第九号により編成下令            牡丹江省東寧県大城子南溝において編成完結            (昭和二十年四月南鮮に転用した第一二〇師団の残置者(歩兵第二五九連隊、歩兵第二六〇連隊、砲兵隊)と第三第一一國境守備隊、野戦重砲兵第一七連隊よりの転入者を基幹とし在滿他部隊からの編入者をもつて編成)            同日より同地付近の警備            一部は編成直後より東寧國境白刀山子において國境警備(向地視察班)            大城子南溝より老黒山に移駐。同地の警備            現地応召者編入            主力は羅子溝東南地区において陣地構築。一部は老黒山に残留            現地応召者編入            日「ソ」開戦にともない羅子溝付近にあつた主力は、八月十三日より「ソ」軍と各陣地において交戦し多大の損害をうけ爾後分散行動となる。            老黒山残留隊は部隊主力に合流</p>						
摘要								

至 自	至 自
10 9 9	9 8
10 26 15	15 5 17
<p>国境にあつた向地視察班は、主力に復帰のため出発したが途中「ソ」軍の追撃にあい、天橋嶺方面に向かい分散行動となる。</p> <p>分散行動となつたものの大部分は、大平溝、樺皮甸子、汪清、大興溝等の各地でそれぞれ武装解除をうけ、東京城、金蒼の収容所に収容</p> <p>主力は金蒼第五九作業大隊（大尉田辺正夫）に編入</p> <p>金蒼出発</p> <p>彈春經由入「ソ」</p> <p>一部、間島、北鮮方面に向かつたものは、それぞれの地点で武装解除をうけ、延吉、古茂山に収容された。</p> <p>連隊長</p> <p>大佐 松吉 魁 夫</p>	



昭 20										年	歩 兵 才 二 八 五 連 隊 略 歴
9	8	8	8	8	8	7	6	5	1	月	
15	27	19	15	12	9	5	20	28	16	日	
<p>第一 大隊</p> <p>羅子溝陣地を撤退し、樺皮匂子に向かう。</p> <p>樺皮匂子において武装解除</p> <p>金蔵収容所に収容</p> <p>金蔵第六〇作業大隊（少佐内山吉太郎）に編入</p>										略	歴
<p>羅子溝の主力を追及</p> <p>城子溝残留隊は日「ソ」開戦のため同地を出発</p> <p>各駐屯地において日「ソ」開戦となる。</p> <p>英武第一五二八四部隊の通称号を使用</p> <p>一部は城子溝に残留し七月現地応召者の教育実施</p> <p>主力は間島省汪清県羅子溝附近の陣地構築</p> <p>一部（第三大隊）は、汪清県樺皮匂子附近の陣地構築</p> <p>同日より同地の警備</p> <p>（第一二八師団および第一一二師団よりの転入者をもつて編成）</p>										略	

昭 20				自 至		昭 20				
8	8	8	8	8	8	8	8	8	10	9
23	14	11	9	29	23	15	14	10	1	20
<p>金蒼出發 暉春經由入「ソ」</p> <p>第二大隊 羅子溝飛行場の警備 同地を出発 樺皮甸子陣地へ後退の師団主力のため三道河子付近の警備、以後「ソ」軍と交戦し分散行動 小汪清、東京城、大興溝、樺皮甸子、敦化等の各地で武装解除。一部北鮮に脱出したものもある。金蒼、間島、敦化等の各作業大隊に編入。入「ソ」</p> <p>第三大隊 羅子溝第一飛機場警備 西三道河子に移駐 「ソ」軍進入のため、同地出發。大興溝を経て天橋嶺、春陽方面に向かう。 大石頭において部隊解散 朝鮮に向つたものは古茂山収容所 東京城方面に向つたものは、東京城で武装解除 その他大部のものは少数グループで行動し各所で満人等の攻撃を受け相当の損害を蒙つた。</p> <p>連隊長 大佐 阿久 刀川 越夫</p>										

昭 20										年	月	日	略	歴	摘 要
自					至										
10	9	9	10	8	8	8	8	7	7						
10	19	10	20	31	11	10	9	30	10						
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令          牡丹江省老黒山において編成完結          (第一二八師団各歩兵連隊よりの転入者により城子溝において編成に着手、七月二十五日に老黒山に移動して編成完結)          同日より同地の警備          日「ソ」開戦のため一部は羅子溝に転進          主力は老黒山出發          頭道溝着。同地において分散配備についたが「ソ」軍の進撃急で互に連絡がとれず四散。小行動群に分れて石頭、東京城、金蒼、牡丹江、北鮮方面に向かう。          石頭、東京城、天橋嶺、明月溝等各地において武装解除をうけ、一部のものは武装解除をうけることなく部隊と別行動している。          金蒼第六三作業大隊(大尉山本宗市)に編入          金蒼出發          琿春經由入「ソ」</p>															

2485

	9	9	8
	12	10	23
<p>一部は東京城第二六六作業大隊（大尉西尾元）に編入  同地出発  綾芬河經由入「ソ」  大隊長  初代大尉 山下俊男  二代大尉 西尾元（20、8、11より）</p>			

2486

野砲兵才一二八連隊略歴									
通称号 満第三四〇部隊 英武第一五二八五部隊									
昭	略 歴								
年	略 歴								
20	略 歴								
月	8	7	7	6	6	5	4	1	略 歴
日	9	25	10	22	20	17	10	16	略 歴
	<p>軍令陸甲第九号により編成下令 牡丹江省東寧において第一二八師団砲兵隊編成完結 (昭和二十年四月南鮮に転用した第一二〇師団砲兵隊の残置者と野戦重砲兵第九連隊よりの転入者をもつて編成) 同日より同地の警備 現地応召者編入 砲兵連隊に改編のため東寧重砲兵連隊より多数編入 主力は陣地構築のため間島省汪清県羅子溝大喊廠付近に移駐 一部は東寧に残留 軍令陸甲第一〇六号により野砲兵第一二八連隊編成完結 現地応召者編入(東寧残留隊において教育) 東寧残留隊は、日「ソ」開戦にともない主力に追及すべく東寧を出発したが、途中八月十日「ソ」軍の急襲により分散行動</p>								
	摘 要								

2487

		至 自		至 自					
		10	9	8	9	8	8	8	8
		5	18	30	15	9	30	28	17
		<p>各陣地において「ソ」軍と交戦し多大の損害をうけ四散し、小グループに別れて行動</p> <p>その大部のものは樺皮甸子、老夏河、小汪清、天橋嶺、汪清等の各地で武装解除</p> <p>東京城第二六三作業大隊（少佐須田蔵三）に編入</p> <p>東京城出發</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>一部のは金蒼第六一作業大隊（大尉岩谷好成）に編入</p> <p>金蒼出發</p> <p>琿春經由入「ソ」</p> <p>連隊長</p> <p>少佐 勝 又 文 雄</p>							

2488

										昭 20	年 月 日	才 一 二 八 師 団 工 兵 隊 略 歴
8	8	8	8	8	7	6	5	4	1			
19	18	14	12	9	5	1	17	10	16			
同日より同地の警備 現地応召者編入 主力は陣地構築のため間島省羅子溝付近に移駐 一部は東寧に残留 現地応召者編入 日「ソ」開戦にともない東寧残留隊は同地出発 羅子溝において主力に全員合流 「ソ」軍と交戦。樺皮甸子に転進 樺皮甸子において武装解除 同地出発										略	歴	
											摘 要	

	10	9	9	8
	2	19	4	22
	<p>           金蒼収容所に収容            金蒼第五八作業大隊（大尉福本留男）に編入            金蒼出発            陣春経由入「ソ」            隊長            少佐 柳田栄蔵         </p>			

2490



昭										年	月	日	才一二八師団通信隊略歴
20													
8	8	8	8	8	8	6	5	4	1				
17	16	15	14	12	19	下旬	17	10	16	略	歴	摘要	
<p>軍令陸甲第九号により編成下令 牡丹江省東寧県城子溝において編成完結 (昭和二十年四月南鮮に転用した第一二〇師団通信隊の残置者を基幹とし若干他部隊よりの転入者をもつて編成) 同日より同地の警備 現地応召者編入 主力は間島省汪清県羅子溝に移駐し、陣地構築。 一部は城子溝に残留 日「ソ」開戦 城子溝残留隊は、羅子溝の主力に合流。同地において「ソ」軍と交戦 同地出発 樺皮甸子に転進 同地において「ソ」軍と交戦 同地において武装解除</p>													

2491

自 至				
10	9	9	9	8
10	26	15	15	20
隊 長 大尉 田 辺 正 夫 毘 春 経 由 入「ソ」 同 地 出 発 金 蒼 第 五 九 作 業 大 隊 (大尉 田 辺 正 夫) に 編 入 金 蒼 に 収 容				

2492

						昭 20	年 月 日	才 一 二 八 師 団 輜 重 隊 略 歴
						4 1		
9	8	8	8	8	5	4 1		
						10 16	略 歴	通称号 満第三〇三部隊 英武第一五二八八部隊
4	18	16	13	9	10	10 16		
<p>軍令陸甲第九号により編成下令 牡丹江省東寧県大肚子川において編成完結 (第一一二師団輜重隊の編成担任により、昭和二十年四月南鮮に転用した第一二〇師団輜重隊の残留者と独立輜重第五二、第六五、第六九中隊からの転入者をもつて編成) 同日より同地の警備 主力は障地構築の資材輸送のため、大興溝、羅子溝付近、大喊廠、穆稜の各地に分散配備。 一部は大肚子川に残留 日「ソ」開戦 大肚子川の残留隊は大興溝の主力に合流 大興溝付近において「ソ」軍と交戦 主力は大興溝において武装解除後金蒼に移動 金蒼第五八作業大隊(大尉福本留男)に編入</p>								摘要

2493

		9	9	8	8	10
		12	10	23	20	2
		瑠春経由入「ソ」	東京城出発	東京城第二六六作業大隊（大尉西尾元）に編入	一部は老夏家において武装解除後東京城に移動	瑠春経由入「ソ」
	隊長					金蒼出発
	中佐 鴉田武彦					

2494

昭								年	月	日	才一二八師団兵器勤務隊略歴
20											
8	8	8	8	8	7	6	5				
27	20	17	16	13	10	1	15	31	1	略	通称号 英武第一五二八九部隊 英武第一三九九五部隊
軍令陸甲第七五号により編成下令 牡丹江省東寧県城子溝において編成完結 (第一二八師団司令部兵器勤務班を基幹とし五月十七日在満応召の編入者をもつて編成) 同日より同地において勤務 主力は間島省汪清県羅子溝に移駐し、陣地構築。 一部は城子溝に残留 主力は汪清県張家店に移駐 主力は大興溝に移駐 城子溝残留隊は主力に合流 大興溝において「ソ」軍と交戦 主力は同地において武装解除 同地出発 金蒼収容所に収容											
略 歴 摘 要											

2495

至	自	至	自	至	自
10	9	9	9	9	8
10	26	18	15	15	30
<p style="text-align: right;">金蒼第六一作業大隊（大尉岩谷好成）に編入                      金蒼第五九作業大隊（大尉田辺正夫）                      金蒼出発                      暉春經由入「ソ」</p> <p style="text-align: center;">隊長                      中尉 柳沢 竜吉</p>					

2496

昭 20											年	月	日	略	歴	摘 要
至 自																
10	9	9	9	8	8	8	8	8	6	4	1					
10	26	15	15	19	18	17	13	9	上旬	10	16					
<p>日「ソ」開戦</p> <p>間島省汪清県羅子溝に移駐し病馬の収療</p> <p>同日より同地において病馬の収療</p> <p>牡丹江省東寧県城子溝において編成完結</p> <p>軍令陸甲第九号により編成下令</p>											<p>才一二八師団病馬廠略歴</p> <p>通称号 満第五二四部隊 英武第一五二九〇部隊</p>					
<p>日「ソ」開戦</p> <p>「ソ」軍の攻撃により転進のため同地出発</p> <p>主力は樺皮甸子に集結</p> <p>同地において武装解除</p> <p>一部は張家店において武装解除</p> <p>金蒼収容所において合流</p> <p>主力は金蒼第五九作業大隊（大尉田辺正夫）に編入</p> <p>同地出発</p> <p>琿春經由入「ソ」</p>																

2497

		9	9	9
		20	13	3
		<p>一部は金蔵収容所より間島収容所に移動  間島第一四作業大隊（見士星野芳夫）に編入  間島出発  琿春經由入「ソ」  廠長  獣医大尉 石井賢一郎</p>		



昭 20		年	月	日
至	自			
9	7			
9	7			
8	7			
8	7			
8	7			
8	7			
8	7			
2	28			10
1	28			10
30	28			10
27	28			10
17	28			10
13	28			10
10	28			10
9	28			10

東京城収容所に収容

東京城第二六八作業大隊（大尉岡村清英）に編入

大城廠出発、東京城に向かう。

主力は同地において武装解除

「ソ」軍と交戦

間島省大城廠着。同陣地守備

一部は同地残留

同日より国境警備

主力は日「ソ」開戦にともない間島省大城廠に転進のため同地出発

（第一国境守備隊司令部（東寧旅団司令部）よりの転入者（復帰による）をもつて編成）

軍令陸甲第一〇六号により編成下令

牡丹江省東寧県東綏において編成完結

（第一国境守備隊司令部（東寧旅団司令部）よりの転入者（復帰による）をもつて編成）

同日より国境警備

同日より国境警備

独立混成才一三二旅団司令部略歴

通称号 奮戦第三七五二二部隊  
奮戦第三七五二三部隊

略 歴

摘要

	11	11	11	9	9	9	9	8	8	9	9
	7	3	1	18	10	8	3	30	9	17	17
	<p>同地出発</p> <p>綏芬河経由入「ソ」</p> <p>東寧残留隊は同地において戦闘に参加</p> <p>牡丹江に転進</p> <p>蘭江に転進。同地において武装解除をうけ、同地の収容所に収容</p> <p>蘭江第二八五作業大隊（大尉山崎登）に編入</p> <p>同地出発</p> <p>綏芬河経由入「ソ」</p> <p>将校は、牡丹江将校第一大隊（大佐宮岸初次）に編入</p> <p>同地出発</p> <p>綏芬河経由入「ソ」</p> <p>司令官</p> <p>少将 鬼 武 吾 一</p>										

昭 20									年	略	略		
至 自												月	日
9	8	8	8	8	8	8	8	7					
18	24	30	28	26	26	10	9	30	10				
金蒼第五大隊 (大尉 竹下百馬) 金蒼第五大隊 (中尉 竹下百馬) 金蒼第五大隊 (大尉 尾田喜勝) 金蒼第五大隊 (大尉 尾田喜勝) 金蒼第五大隊 (大尉 尾田喜勝) 金蒼第五大隊 (大尉 尾田喜勝) 金蒼第五大隊 (大尉 尾田喜勝) 金蒼第五大隊 (大尉 尾田喜勝) 金蒼第五大隊 (大尉 尾田喜勝)									軍令陸甲第一〇六号により編成下令 牡丹江省東寧県東綏において編成完結 (第一国境守備第一地区隊 (東寧旅団独立歩兵大隊) よりの転入者 (復帰による) をもつて編成) 同日より東寧国境 (勝関台陣地) の警備 日「ソ」開戦にともない陣地の守備 「ソ」軍の攻撃をうけ、多大の損害をうけた。 勝関陣地において武装解除 同地出發 金蒼收容所に收容された後将校、下士官兵に区分される。		独立歩兵才七八三大隊略歴 通称号 奮戦第三七五二四部隊	歴	
									摘 要				

2501

		至 自		至 自	
		11	11	10	9
		7	3	20	30
				8	1
				19	18
		<p>同地出発</p> <p>暁春經由入「ソ」</p> <p>将校は、間島将校収容所に収容</p> <p>間島将校第一大隊（大佐谷岩蔵）に編入</p> <p>同地出発</p> <p>満洲里經由入「ソ」</p> <p>大隊長</p> <p>大尉 斉藤 俊治</p>			

昭和20年							独立歩兵才七八四大隊略歴	
略								通称号 奮戦第三七五二五部隊
9	8	8	8	8	8	7		
8	30	25	19	16	9	28	10	
<p>同日より国境守備            (大城子南溝、南天山、要山等に配備)            日「ソ」開戦にともない主力は、三角山に集結し大城廠に転進のため同地出発。            途中「ソ」軍の攻撃をうけ一部は別行動となった。            一部は各陣地に残留            主力は大城廠着            老夏家着。同地において武装解除            東京城収容所に収容            東京城第二六四作業大隊(大尉大森寅)に編入            同地出発</p>							<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令            牡丹江省東寧県東綏において編成完結            (第一国境守備第二地区隊(東寧旅団歩兵連隊第二大隊)よりの転入者(復帰による)をもつて編成)</p>	
							摘要	

2503

至 自					至 自					昭
										20
10	10	9	9	9	8	8	8	8	8	9
25	1	15	7	4	23	11	10	18	10	17
<p>           綏芬河經由入「ソ」            各陣地残留隊の行動            残留隊は「ソ」軍の攻撃をうけ四散し、各小行動群に別れた。            その一部は大臈廠において主力に合流            その他の者は東寧より大臈廠に転進途中「ソ」軍の攻撃により別行動となった。            その一部は間島省汪清県汪清において武装解除            間島収容所に収容            間島第三作業大隊（少尉国井義孝）に編入            同地出発            琿春經由入「ソ」            隊長            大尉 大森 寅         </p>										

2504

昭 20			年	独立歩兵才七八五大隊略歴	
8 8 8			7 7		通称号 奮戦第三七五二六部隊
18 14 12			28 10		
<p>東寧に残留した寺島小隊は大喊廠に到着し主力に合流</p> <p>主力は大喊廠着</p> <p>「ソ」軍戦車の攻撃をうけ、分散し、それぞれ大喊廠に向つて転進</p> <p>主力は金鳥山着</p> <p>寺島一ヶ小隊は、同陣地に残留</p>			略	略	
<p>同日夕刻より、主力は後方に転進のため同陣地出発。城子溝を経て金鳥山に向かう。</p> <p>寺島一ヶ小隊は、同陣地に残留</p> <p>主力は金鳥山着</p> <p>「ソ」軍戦車の攻撃をうけ、分散し、それぞれ大喊廠に向つて転進</p> <p>東寧に残留した寺島小隊は大喊廠に到着し主力に合流</p>			<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>牡丹江省東寧県東綏において編成完結</p> <p>(第一国境守備第三地区隊(東寧旅団歩兵連隊第三大隊)よりの転入者(復帰による)をもつて編成)</p> <p>同日より国境警備</p> <p>日「ソ」開戦にともない、東門、高安村、南高安村の各国境監視哨は、主力陣地に復帰し全力をもつて陣地の守備</p> <p>同日夕刻より、主力は後方に転進のため同陣地出発。城子溝を経て金鳥山に向かう。</p> <p>寺島一ヶ小隊は、同陣地に残留</p> <p>主力は金鳥山着</p> <p>「ソ」軍戦車の攻撃をうけ、分散し、それぞれ大喊廠に向つて転進</p> <p>東寧に残留した寺島小隊は大喊廠に到着し主力に合流</p>	歴	
			摘	要	

2505

	10	9	9	9	9	9	8	8	8
	8	19	18	9	17	8	30	22	19
<p>大隊長 大尉 柴田常吉</p>	<p>輝春經由入「ソ」</p>	<p>同地出発</p>	<p>同地出発</p>	<p>金倉第五作業大隊（大尉千田喜勝）に編入</p>	<p>間島省汪清着。同地において武装解除をうけ、金倉収容所に収容</p>	<p>金鳥山において分散した部隊の一部は、伊林↓穆稜↓寧安↓東京城を經由</p>	<p>綏芬河經由入「ソ」</p>	<p>同地出発</p>	<p>主力は東京城第二六四作業大隊（大尉大森寅）に編入</p>



至 自		至 自		昭 20	年 月 日	独立歩兵才七八六大隊略歴	
9	8	8	8	7			7
2	30	29	20	28			10
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令            牡丹江省東寧県東綏において編成完結            (第一国境守備第四地区隊(東寧旅団歩兵連隊第四大隊)よりの転入者(復帰による)をもつて編成)            同日より国境警備            (郭亮船口、勾玉陣地に配備)            日「ソ」開戦にともない第一三二旅団主力の大喊廠に転進を掩護し、同陣地において「ソ」軍と交戦、東寧重砲兵連隊第六中隊(定光中尉以下約百名)および第一三二旅団挺進大隊の残留隊は、大隊長の指揮下に入りこの戦闘において多大の損害をうけた。            陣地を脱出したものの主力は本部駐屯の鏡ヶ岡に集結。            転進のため同地出発            東寧において武装解除後、金蒼収容所に収容された。</p>							
					摘 要		

2507

至	自	至	自	至	自	至	自
9	9	8	10	9	9	9	8
14	3	30	8	27	19	17	29
<p>陣地を脱出した各小行動群は東京城、寧安、羅子溝、汪清等の各地において                      武装解除をうけ、金蒼、東京城收容所等に收容</p> <p>金蒼第五一作業大隊(大尉 岡 克己)に編入                      金蒼第五五作業大隊(大尉 千 田 喜勝)に編入</p> <p>同地出發</p> <p>琿春經由入「ソ」</p> <p>東京城に收容されたものは東京城第二六五作業大隊(大尉河野浩一)に編入                      同地出發</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>大隊長                      少佐 駒井庄五郎</p>							

2508

独立混成才一三二旅団挺進大隊略歴										
通称号 奮戦第三七五二八部隊										
昭	年	月	日	略						歴
20		7	7	軍令陸甲第一〇六号により編成下令						
		7	28	牡丹江省東寧県石門子において編成完結						
		8	9	同日より国境警備						
		8	10	日「ソ」開戦にともない東寧三角山陣地において「ソ」軍と戦闘、多大の損害をうけた。						
		8	15	主力は後方の大喊廠に転進のため、同地出発。途中「ソ」軍の攻撃により、多大の損害をうけ山中を分散行動となり、大喊廠に向かう。						
		8	29	一部（第三中隊）は、独立歩兵第七八三大隊長の指揮下に入り東寧に残留。						
		8	30	主力は大喊着。同地において再び「ソ」軍の攻撃をうけ後方に転進						
		9	8	東京城において武装解除をうけ、同地の収容所に収容された。						
		9	9	東京城第二六四作業大隊（大尉大森寅）に編入						
		9	17	同地出発						
				綏芬河經由入「ソ」						
				摘要						

至 自				
10	9	9	8	8
1	27	19	30	27
<p>東寧残留隊は、同地において武装解除をうけ、金蒼収容所に収容  金蒼第五六作業大隊（中尉竹下百馬）に編入  同地出発  瑛春經由入「ソ」</p> <p>大隊長  大尉 斉藤 健太郎</p>				

2510

至 自										昭 20	年	独立混成才一三二旅団通信隊略歴 通称号 奮戦第三七五三二部隊
9	8	8	8	8	8	8	8	7	7	月	略	
3	30	22	21	15	13	10	9	28	10	日		
<p>大城廠着。同地の陣地守備</p> <p>同日出発</p> <p>老夏家着。同地において武装解除をうけ天橋嶺を經由東京城に向かう。</p> <p>東京城収容所に収容</p> <p>同日東京城第二六五作業大隊（大尉河野浩一）に編入</p> <p>東京城出発</p>										<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>牡丹江省東寧県東綏において編成完結</p> <p>（東寧旅団通信隊よりの転入者（復帰による）をもつて編成）</p> <p>同日より同地の警備および通信連絡業務</p> <p>日「ソ」開戦にともない三角山陣地に配備</p> <p>第一三二旅団主力とともに、後方に転進のため同地出発</p> <p>途中「ソ」軍の進入により分散行動となり大城廠に向かう。</p>		摘要

2511

9
14
綏芬河經由入「ソ」 隊長 中尉 蓮輪隆雄

至 自		昭 20	年	独立混成才一三二旅団砲兵隊略歴 通称号 奮戦第三七五二九部隊	
9 8	8 8 8	7 7	月		
3 30	25 22 14	28 10	日		
<p>老夏家着。同地において武装解除をうけ、東京城収容所に収容</p> <p>東京城第二六五作業大隊（大尉河野浩一）に編入</p> <p>同地出発</p>		<p>同日より同地の警備</p> <p>日「ソ」開戦にともない三角山、勾玉、勝鬨等の各陣地に配備</p> <p>主力は、同夜旅団主力とともに後方に転進のため同地出発</p> <p>途中「ソ」軍の攻撃を受け、旅団主力と別れ大城廠に向かう。</p> <p>一部は東寧陣地に残留</p> <p>主力は大城廠に到着。</p>		<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p> <p>牡丹江省東寧県大城子南溝において編成完結</p> <p>（第一国境守備隊砲兵隊（東寧旅団砲兵隊）よりの転入者（復帰による）をもつて編成）</p>	略
				歴	
				摘 費	

2513

	10	9	9	9	8	9
	8	19	18	3	27	14
大尉 河野 浩一	隊長	暉春經由入「ソ」	同地出発	金蒼第五五作業大隊（大尉千田喜勝）に編入	金蒼収容所に収容	東寧残留隊は、東寧において武装解除
						綏芬河經由入「ソ」



昭和20年										独立混成才一三二旅団工兵隊略歴	
至自											通称号 奮戦第三七五三一部隊
9	9	8	8	8	8	8	7	7	7		
14	3	30	23	19	11	9	28	10	10	略	略
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令          牡丹江省東寧県東綏において編成完結          (第一国境守備隊の各地区隊工兵隊(東寧旅団工兵隊)よりの転入者(復帰による)をもつて編成)          同日より同地国境警備          日「ソ」開戦にともない全員三角山陣地に配備し「ソ」軍の攻撃をうけた。          同夜後方に転進のため同陣地出発。旅団主力とともに転進中「ソ」軍の攻撃をうけ各自大喊廠に向かう。          大喊廠着。同地区の陣地を守備したが、「ソ」軍の進入により後方に転進          東京城および老夏家において武装解除をうけ東京城収容所に収容          東京城第二六五作業大隊(大尉河野浩一)に編入          同地出発          綏芬河経由入「ソ」</p>										略	略
										摘要	

2515



至 自		昭 20	年	独立混成才一三二旅団輜重隊略歴 通称号 奮戦第三七五三三部隊	
8	8 8	8	7		月
21	15 13	6	10		日
<p>同日より同地の警備および弾薬資材の輸送。</p> <p>日「ソ」開戦にともない東寧重砲兵連隊の守備陣地暖泉子溝に移駐。</p> <p>「ソ」軍の進入により転進のため同地出発。途中「ソ」軍の攻撃により分散行動となり大喊廠に向かう。</p> <p>主力は大喊廠着。陣地構築資材の輸送。</p> <p>同地出発。</p>		<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。</p> <p>牡丹江省東寧県大城子南溝において編成完結。</p> <p>第一国境守備隊</p> <p>独立混成第八〇旅団輜重隊</p> <p>輜重兵第一二三連隊</p> <p>輜重兵第一二九連隊</p> <p>第一六野戦自動車廠</p> <p>よりの転入者をもつて編成</p>		略	
				歴	
				摘要	

2517

		9	9	8 8
		14	3	30 22
	大尉 松本 勇一	隊長	綾芬河経由入「ソ」。	老夏家着。同地において武装解除をうけ天橋嶺を経由。 東京城収容所に収容。 同日東京城第二六五作業大隊（大尉河野浩一）に編入。 東京城出発。

2518

昭 20		年		月		日	
9	8	8	8	8	8	8	7
18	末	18	17	12	9	5	10
<p>独立臼砲才一中隊略歴</p> <p>通称号 岩第二〇三二二部隊 岩第二六七二二部隊</p> <p>略 軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 間島省琿春県琿春において編成完結。 （野砲兵第一一二連隊の編成担任により同隊および第一一二師団輜重隊よりの 転入者約六〇名に現地応召者を合せて約二〇〇名をもつて編成） 同日より同地付近の警備。 編成後約八〇名は、第一一二師団工兵隊長の指揮下に入る。（終戦後も別行動） 日「ソ」開戦にともない陣地に配備。 野砲兵第一一二連隊と合流。「ソ」軍の攻撃をうけ、隊長以下多大の損害を受 けた。 琿春県密江において武装解除をうけたが、現地応召者の多くは密江に集結する ことなく部隊より離れて汪清方面に向け自由行動となり、八月末日ごろ同方面 において武装解除をうけた。 汪清県金蒼収容所に収容 金蒼第五作業大隊（大尉千田喜勝）に編入。</p>							
							摘 要

2519

	10 9
	8 19
	同地出發。 毘春經由入「ソ」 隊長 少尉 佐藤友武

昭 15	年	東 寧 重 砲 兵 連 隊 略 歴
12	月	
8	日	
2	日	通称号 満第三九〇部隊
略		岩第四三二九部隊 岩第二六七〇九部隊
略		歴
編成下令。		編成
牡丹江省東寧県東寧(市外暖泉子溝)において編成完結		の転入者をもつて編成)
編成		要
本 部 連隊長 中野大佐		第一大隊 大隊長 齊藤少佐(二十四榴 二ヶ中隊)
第二大隊 大隊長 末松少佐(三十榴 二ヶ中隊)		第三大隊 大隊長 大坪少佐
内一ヶ中隊分の火砲は、郭亮陣地に展開。		十屯牽引車 一ヶ中隊
材料廠 早川少佐		同日より東寧国境の警備および陣地の整備

2521

				昭 20	昭 20	昭 16		
8	8	8	8	6	5	4	8	7
19	17	16	9	1		3	2	16
<p>(阿城重砲兵連隊より引継ぐ) 臨時編成(甲)下令(関特演) 東寧において編成完結。次の配備により同地の警備。 第一大隊 大 肚子 川 陣地の整備強化 第二大隊の一部 勝関ならびに郭亮 作命第一一号により、つぎのとおり行動した。 主力(連隊本部第一第二大隊「除第一中隊」) 移駐のため東寧出発。 間島省囹們着。同地の陣地構築。 主力は(第三中隊は同地に残留)朝鮮咸鏡北道南陽に移駐、陣地構築および警備。 日「ソ」開戦。 「ソ」軍の進入により同地において交戦。 同地において連隊長以下全員自爆決行のため部隊解散。 このため負傷者は、敦化陸軍病院に収容され、爆薬不発のため生存した者は自由行動となり、その大部は八月下旬古茂山収容所に収容された。 囹們残留隊は同地において武装解除。</p>								





